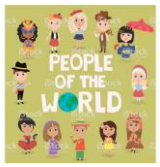
小松川高等学校同窓会講演「異文化の人々との共生」原稿

令和 01 年 6 月 23 日　発表予定

自己紹介



東京都立小松川高等学校同窓会の皆様こんにちは
46期卒業の鶴巻法岳（つるまき　ほうがく）と申します。
長谷川洋一副会長の同級生で、前回の東京オリンピックの前年に、卒業いたしました。

今回、講演のお話をいただき、私の20代から50代にかけての40年余りの職歴のすべてが国際協力に従事し、その間の約3分の1の 14 年が海外勤務であったことから、長きにわたり、異文化、特に外国の人々とのかかわりの中で経験し学んできたことが、少しでも皆様のお役に立てればと思い、この講演をお引き受けすることと致しました。
なお、同窓会報では、講演の演題が長くなっていますが、本日の講演の主旨は**『異文化の人々との共生』**です。
どうぞリラックスしてお聞きいただければと存じます。

さて日本は、来年の東京オリンピックに向けて、観光客を中心に、二千万人規模の外国人の来訪が予想されています。
また、昨年末に、政府が外国人労働者の受け入れの拡大を決めたことなどにより、これからは国内でも外国人とのかかわりが激増していきます。異文化の理解とコミュニケーション能力の向上は、すべての日本人にとって、必要不可欠になっていくこととなります。
また、日本人の文化や価値観が外国の人々の間でどのように見られているかについても、考察したいと考えました。
そこで本日は、まず日本が置かれている労働市場の現況についてお話しし、次に日本人がこれまでに遭遇した、異文化の理解が十分でなかったことから生じた、様々なトラブルへとお話を進めさせていただきます。
それではどうぞよろしくお願いいたします。

日本の労働市場と外国人

職場が外国人と共存する時代がやってくる

#	市区町村		人口
1	神奈川県	横浜市	3,740,172
2	大阪府	大阪市	2,725,006
3	愛知県	名古屋市	2,320,361
4	北海道	札幌市	1,966,416
5	福岡県	福岡市	1,579,450
6	兵庫県	神戸市	1,527,407
7	神奈川県	川崎市	1,516,483
8	京都府	京都市	1,468,980
9	埼玉県	さいたま市	1,295,607
10	広島県	広島市	1,199,252
11	宮城県	仙台市	1,088,669

心のケアの重要性

それではまず現在の日本の労働市場についてお話します。

最近、コンビニやスーパーなどで働く外国人を見かけることが大変多くなりましが、皆さんは、現在、日本国内でどれくらいの外国人が働いているかご存知でしょうか？

　現在の外国人労働者の数は、昨年末で過去最高の約146万人、このわずか5年の間に2倍以上に増えています。

現在の日本社会は、空前の人手不足により、実に9割近くの会社が人材の確保に苦慮しており、そんな状況のなかで、救世主となっているのが実は“外国人材”なのです。

昨年の12月、単純労働を含む外国人材の受け入れを拡大する、入管法（出入国管理及び難民認定法）改正案が成立しました。新たな在留資格が創設されたことにより、これまで以上のスピードで外国人材が増えることは確実で、まさに「職場で外国人と共存する時代」がやってきたのです。

#	市区町村		人口
1	神奈川県	横浜市	3,740,172
2	大阪府	大阪市	2,725,006
3	愛知県	名古屋市	2,320,361
4	北海道	札幌市	1,966,416
5	福岡県	福岡市	1,579,450
6	兵庫県	神戸市	1,527,407
7	神奈川県	川崎市	1,516,483
8	京都府	京都市	1,468,980
9	埼玉県	さいたま市	1,295,607
10	広島県	広島市	1,199,252
11	宮城県	仙台市	1,088,669

外国人労働者の受け入れ態勢については、基本的に身分、給与、労働環境、福利厚生などが、人権の観点からも日本人労働者と同等であるかが問われることとなりますが、もう一つの重要なキーワードとして「心のケア」があります。

日本の職場では、これまで、仕事で外国人材との接点がなかった人がほとんどで、経験の蓄積もノウハウも十分ではありません。受け入れ体制が不十分のまま、毎日、異文化と直接かかわらざるを得ない職場環境となれば、お互いの「思い違い」や「差別」を含めた様々なトラブルが生じ、双方に不平や不満が発生することは容易に想像されます。
日本側には、外国の方々と柔軟に、また公正に対応できる人材が必要不可欠で、同僚となる日本のスタッフにとっては、知らなかったでは済まされない極めてシリアスな問題なのです。
そこで、これから外国の方々と良好な関係を構築し、共に働き生活していくためには、どうしたらよいかを考え、実践していきましょう

気候・風土と勤労観（努力が報われるか）

それでははじめに異文化の違いを、分かり易く理解するため、気候風土が、その土地で生活する人々に、どの様な影響を与えているのかについて考察してみましょう。
日本では美徳とされる努力や工夫は、どの国の人々にも生活上、必要不可欠なことなのでしょうか。
地球上の地域を、大きく 3 つに分けて考えてみましょう。
砂漠地域では農業ができず、「人間の努力や工夫」の余地があまりにもわずかなものになっています。人間の力の及ばぬ自然の猛威があり、生き残るために自然資源の確保と奪い合いが避けられないし、移動が多く定住人口が少ない部族社会が形成されます。
温暖な平地の地域では、農林漁業に適しており「人間の努力や工夫」が報われ、勤勉の思想が生活の中に根付き、人口も多く定住するために、文明の発展が容易となります。
熱帯地域や南洋では、常に自然の恵みがあり、飢えることなく、もちろん凍死する心配も無い。余分な食料保存は腐る心配があり、明日のために蓄積する必要性は薄く、勤勉に働く意義や意欲がなくても生活上問題はありません。

異文化トラブル
タイでの事例

次に、タイでの異文化トラブルの事例を紹介します。
タイでは仏教が生活の中心にあって、僧侶は社会的に高い尊敬を受けています。どのような理由があろうとも、お寺では肌の露出が多いものを着用できません。たとえ外国人であっても、短パン、T シャツで神聖な寺院に行けば、タイの人々に、信仰している仏教が冒涜されたとして、極めて強い不快感を持たれてしまいます。
また、日本では、子供の頭をなでてほめることは一般的な生活習慣ですが、タイの宗教では子供の頭には神が宿っており、安易に子供の頭に手を触れることはできません。

日本人が良かれと思って行動したことが、日本とは異なる社会習慣や価値観の文化圏の人々には、許せないどころか取り返しのつかない行動となってしまうこともあり得るのです。
実は、外国人も、日本国内でこの事例と同様なケースを数多く引き起こしているという現実もあります。
お互いの信頼を得ていくため、その国の文化、特に日本の文化と異なる価値観や習慣を学び、私たちの敬意や尊重の気持ちを表すことが、その第一歩となります。

アメリカでの事例
日系企業の異文化
トラブル

次に、日本人にとって外国といえば、アメリカをイメージされる方が多いと思いますので、アメリカで実際にあった、異文化に起因する日系企業の海外トラブルの事例を見てみましょう。
数年前、アメリカのとある日系企業の工場で、アメリカ人労働者（現地従業員）と日本人の現場監督官の間で、小さなトラブルが発生しました。それは、工場で生産している工業製品に、小さな「傷」がたびたび発見されるようになったことです。
原因を調べた結果、従業員のネールアートによるものであることが分りました。

アメリカ文化の特徴とビジネス風土

現場監督官は、「傷」がどうして生じたのかについて状況を説明したうえで、商品の品質管理を徹底するために、従業員に工場ではネールアートを落とすよう口頭で指示しました。
しかし、その従業員は、化粧は個人の自己表現であり、第三者には個人の自由を束縛する権利はないはずだ。また製品に生じた「傷」自体も目視では発見できないほど小さなもので、製品の商品価値は変わらないと反論し、監督官の指示を聞き入れませんでした。
そこで監督官は、従業員の間で不平等が起こらないよう、全従業員に対して、勤務（作業）中はネールアートをしてはならないとの通告を出しました。
しかし、従業員たちはこの通告を人権侵害としてとらえ、弁護士と相談し、この企業を相手取り集団訴訟を起こしました。
長い裁判の結果、最終的に会社側が敗訴し、従業員たちに数十万ドルの賠償金が支払われようやく解決に至りました。
この問題は、会社側、特に現場監督官が異文化理解とコミュニケーションに精通していれば、トラブルの初期の段階で原因が究明され、お互いが納得できる、穏やかな解決方法が策定され、日系企業にこのような大きな損失を負わせないで済んだのではないかと言われています。
日本でも、個人の人権尊重の価値観“セクハラ”や“採用・昇進の差別”などは、同様の訴訟はありますが、裁判で有罪者に課せられる罰や賠償金は、日本と較べアメリカの方がはるかに厳しいのが現実です。

それではアメリカがどのように形成されていったのか、日本とは異なる文化の特徴と、ビジネス風土を考察してみましょう。
アメリカ文化の源泉としては、開拓移民のフロンテイア精神、プロテスタント、多民族混成国家、歴史が浅い、開発努力が報われる広大で豊饒な大地などがあげられます。
ヨーロッパでの宗教的圧制、生活苦、飢饉などを逃れ、新天地への開拓移民として移住し、ゼロからの出発で植民地からの独立を勝ち取った歴史と環境は、誰にも束縛されない自由の重視、自立と自己責任、財産や人権の尊重、チャレンジと成功者への賛辞、創意工夫や効率の重視など、活力のある男性的文化を生んできました。
また、アメリカン・ドリームを求めて、世界各国からの集まった移民の混成国家である環境は、秩序を保つための明確なルールや契約書の策定と遵守が必要であり、また、団結の為には異文化を超越して共有できる汎用的価値観や論理（民主主義、自由主義、私的財産保護など）が求められてきました。
そのことは同時に、厳しい生存競争をサバイバルしていくために、明快で強い自己主張や議論の展開、他人の知恵や専門家の活用などの文化を生んできました。
また、プロテスタントを主とするキリスト教の影響は、勤勉、休日や私生活重視、神の前の平等と正直、倫理的自己抑制、ボランテイア、十字軍的使命感、幸・不幸も神の意思とする世界観、などに反映されています。

アメリカ人は明確な自己主張を社会生活の基本と考えている

一般にアメリカ人は自己表現が巧みですが、それは小学校時代から自己のプレゼンテーションやディベートの授業があり、家庭での子供のしつけでも、自己主張と自己責任を明確にするよう教育されています。アメリカのような多民族国家では、価値観や出身国文化の差などを超越する、論理的プレゼンテーション能力が生存競争で必須であるところが、同質集団で「以心伝心」が通用する日本人社会と全く異なっています。

それでは、ここから日本文化の源泉と特質について考えてみましょう。
異文化理解を進めるうえで、先ず自国文化を明確に説明できればとても役立ちます。そして、日本の「あたりまえ」は必ずしも世界の「あたりまえ」ではないことも考えていきましょう。
日本の地理的条件は、周囲を海で囲まれた島国で、歴史的に、日本独自の文化を育んできました。
温暖多湿で四季のある気候や風光明媚な自然は、日本人の繊細な美意識や自然崇拝を生み、地震や風水害などの自然災害が多いことは、独自の諦観や無常観を生み出しました。
また、米作りに適した気候や大地は、努力が実る勤勉の文化を支え、農耕中心のムラ社会を形成しています。
日本の、農耕中心のムラ社会では、全てのしきたりと情報を共有するために、明確で論理的会話は必要なく、他への配慮心も強く働き、「以心伝心」として、遠まわしで曖昧な表現や伝達が文化となりました。

曖昧表現と以心伝心の日本文化

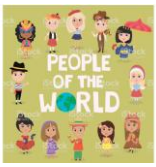
この曖昧な表現や「以心伝心」の文化は、日本人同士なら問題は生じませんが、論理的言語表現を重視する文化の、欧米人や中国人との会話では齟齬を来たし、不親切で不誠実な日本人の態度と誤解されることがあり得ます。
また、日本では「空気を読む」「察する」といった社会的な精神風土がありますが、外国では基本的に発せられた言葉によってコミュニケーションが成立しており、「以心伝心」や「暗黙の了解」はあり得ません。
例えば生活の中の音に対する感性も違います。
日本を代表する食品の一つの「蕎麦」ですが、皆さんは音をたてないようにして食べて美味しいと感じられるでしょうか。
実は欧米の人々にとって、蕎麦をすする音はとても不愉快な音なのです。とは言え、彼らは、食事中に人前で大きな音で洟をかんでも、それは生理現象だとして不快さは感じないのです。

日本とは異なる社会習慣や価値観の事例

- 直接的な意思表示は不作法であると考える日本人
  （何を飲みたいですか⇒あるもので結構です）
  （つまらないものですが⇒意味が分かりません）
- 直接的な意思表示や感謝を求めてくるアメリカ人
  （目の前ですぐにプレゼントを開封し感想べる）
- 遠慮の作法を積み上げコミュニケーションを図る日本人
  （奥ゆかしさは美徳）
- 遠慮の作法は存在しないアメリカ人
  （奥ゆかしさはコミュニケーションに必要はない）
- 身内を卑下して紹介する文化はない。
  （愚妻などと紹介したら人間性を疑われる）
- 「お・も・て・な・し・」は万国共通ではありません。
  日本人には喜ばれる思いやりのサービスでも、ケースによっては個人の自由が制限されていると感じ、過剰で、煩わしい、不快、迷惑と感じる外国人も多いのです。
  個別識別まではできなくても、地域的、宗教的な特性には、十分な理解と配慮が必要でしょう。「小さな親切」が「大きなお世話」にならないよう、本当に喜ばれることは何かを考えましょう。

ここでアメリカ人の妻から、日本語会話の初心者時代に苦労した体験から、日本の皆様に二つのアドバイスがあります。
外国人と日本語で会話されるときぜひ心がけてください。
1．必ず主語（誰が）を入れること。
2．丁寧語や謙譲語はなるべく使わないこと。

多文化が共生し共栄共存していくために不可欠なこと



もともと人間は、自分が生まれ育った環境に慣れ親しみ、自分たちを守るために、自分とは違った行動をする人やその集団を、異端者（よそ者、外人）として敵視し、本能的に拒否してきました。
そのため、自国の文化やそのやり方が優れていると信じ込み、外国人との様々な違いを理解しようとしない人も存在します。
しかしそれでは、多文化が共生し共存共栄していくための、お互いの異文化理解やコミュニケーションを、進展させることはできません。
文化の違いは、価値観や生活様式の差であって、優劣の差ではありません。風貌や衣装についても同じことが言えます。
日本人は、人生の節目を、異なる宗教の下で行う習慣があります。誕生祝はお宮参りへ、結婚式は教会で、そして最後はお寺へ。このような習慣は、キリスト教やイスラム教のように、一神教を信仰する人々にとっては、とても不思議で信じられないことなのです。
また、日本の若い女性の間で多く見られる、科学的根拠に乏しい「占い」や「パワースポット」への、異常なほどの関心の高さや信じ方、また血液型へのこだわりなどは、外国人にとても奇異に映っています。諸外国の方々から見れば、このような日本人は社会人として未成熟であると思われる可能性さえあります。

これから外国の方々と良好な関係を構築し、共に働き生活していくためには、「互いの言語を理解する、互いの文化や信仰の尊重をする、互いの価値観などの違いを学び理解し合う」といった真摯な努力や、フェアな環境・関係作りが何よりも重要になります。まずは私たちから、異文化の人々とのかかわりを変えていきましょう。

人生の転機その1
平凡な生活を送る
高校生

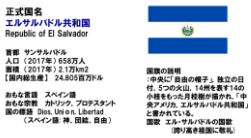
それでは、私が、どのようにして国際協力をライフワークにしていったか。そこで何を得たかについてお話いたします。
第一の転機は、高校 3 年生の時の進路相談でした。当時、何の目標もなく、努力したことも、苦労したこともない自分にようやく気付き、このままでは、成り行きで生きていくしかないという将来に、大きな不安を覚えました。
何か得意なことを身に着けたい。できれば自分が好きな仕事につき、一生誇りをもって続けたい。その思いから、誰もが心地よく気軽に見たり使ったりできる、デザインを学ぶことに挑戦することとしました。
大学では工業デザインを、大学院では金属工芸を学びました。またこの時にご指導いただいた恩師から、生涯にわたり精神的なサポートと助言をいただくこととなり、それまで想像することさえなかった国際協力の道に進むこととなります。

人生の転機その2
青年海外協力隊事
業への参加

大学院修士 2 年の秋、学生課からいただいた青年海外協力隊の募集資料には、中南米のある国から、国立芸術高校にグラフィックデザイン科を新設したいので、デザイン教師を派遣願いたいという教育省からの要請が掲載されていました。
未知の国で、初めてデザインを学ぶ高校生たちのための仕事。もし選ばれたら、全力でやり遂げたい仕事だと、感動で身震いしたことを鮮明に覚えています。
しかし、大手企業からデザイナーとして内定を受けており、協力隊に参加すれば、人生計画の変更を余儀なくされます。
将来の不安との葛藤で悩んでいた私に、恩師からは以下の重い助言を頂き、この助言が決め手となって協力隊への参加を決意しました。

「人生は自分で切り開いていくものだ。このような素晴らしい機会は、誰にでも巡ってくるものではない。
その国の高校生のために、お前の力が必要とされ、役に立てるのであれば、知見の全てを尽くして取り組んでみてはどうか。
この経験は必ずお前を成長させるはずだ。今、帰国後のことを心配するな。必ず新たなチャレンジに立ち向かえる人間になって帰ってくると信じている。」

昭和 46 年 8 月



約 3 か月の語学を中心とした合宿訓練を受け
エルサルバドル共和国の首都サンサルバドル
教育省中等育局　国立芸術高等学校
グラフィックデザイン科の教師として着任。すぐに同科の創設を手掛け 2 年 5 か月後、2 回目の卒業生を輩出し帰国。
この間に、日本にいては得られないであろう多くのことを学ばせていただき、仕事と生活で多くのかかわりのあった、同僚の教職員、高校生をはじめ、現地の多くの方々に様々なサポートをいただき無事に使命を終えることができました。

青年海外協力隊事業の制度の説明

それでは、青年海外協力隊事業についてお話しします。
青年海外協力隊（20歳以上39歳まで）は事業発足（初派遣ラオス昭和40年）から、シニアボランティア（40歳以上69歳まで）は平成2年から派遣が開始され、現在54年目という長い歴史を持ち、両制度を合わせると、これまでに世界91か国にのべ 4 万人を超える方々が参加しています。
日本の青年（後にシニアも）をボランティアとして受け入れたいという国々からの公式要請に基づき、現地で役立つことのできる技術、技能などを持ち、意欲にあふれた健康な日本の青年を対象に公募して選考し、適格者を約 3 か月の語学を中心とした合宿訓練を実施して、派遣する国（外務省所管）の事業。派遣期間は 2 年間（短期派遣もある）。すべての経費（訓練、派遣、生活、医療厚生、国内積立金など）は政府開発援助 ODA 予算。

いよいよ国際協力への道へ
人生の転機その3
生涯をかける職業の選択

エルサルバドルから帰国後、これからの進路に迷う私に、組織の代表である青年海外協力隊事務局長から、次のような言葉をいただきました。
「日本の青年の『心をデザインする』仕事に取り組んでみないか。国の内外にこの事業の素晴らしさをアピールしていく仕事だ。」
このお話をいただき、「色と形のデザイン」の仕事から、「青年の心をデザインする」ことをライフワークにする決意しました。
海外で、貧しく弱い立場の草の根の人々のために、日本の青年たちを啓発し派遣しその活動を支援する。具体的には、国際ボランティアの募集、選考、教育訓練、海外における活動支援、帰国後の進路指導などが主な仕事になります。

JICA（国際協力機構）の海外協力隊事業の主な目的

海外協力隊事業の主な目的は次の三つです。
（1）開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与
（2）異文化社会における相互理解の深化と共生
（3）ボランティア経験の社会還元
なかでも、自分自身にとってこの事業の最大の魅力は、日本の青年が、開発途上国の恵まれない人々のため、自ら現地で協力や支援を実践していく過程で多くのことを学び、結果として参加者本人の自己成長を促すことから非常に優れた人材育成制度でもあることです。
具体的には、現地の草の根の人々の心情を深く理解し、様々な試練に直面し、現地の人々と共に、挫折も達成感も共有するという貴重な体験を積み重ねていきます。
この体験が、日本や国際社会に還元され、グローバルな人材となって、活躍されることは間違いありません。

★協力隊に参加し得たこと学んだこと

- カルチャーショックという海外ならではの試練を実体験できたこと。
- 草の根レベルの人々の貧困問題を目の当たりに。
- 劣悪な医療、衛生事情。
  （医者もなく薬も買えない）
  （5歳になる前に約 15％以上が病死するという現実）
- ごく普通の青年でも役に立てることがあること。
- 日本の物差しでしか判断できない自分を知ったこと。
- 価値観の相違。正解は一つとは限らない
  （コロンブスは英雄か？勝者による歴史観？）
- 多様な人生観があり、豊かさとは何かを考えたこと。
- 「清々しく爽やかに生きる」という人生目標を得たこと。
- 同じ「こころざし」を持つ友人が数多くできたこと。
- サッカーを見る楽しさを学んだこと。
- 南米音楽、特にフォルクローレ好きになったこと。

★協力隊活動に不向きな人

- 常に上から目線で発言したり行動したりする人。
- 現実を素直に受け止めることができない人。
- 観察したり分析したりすることが不得意な人。
- 協調性が見られない人。
- 不平不満を常に口にする人。
- 日本食へのこだわりが強すぎる人。
- 創意工夫が不得意な人。
- 日本と同じ道具や機材が必要な人。
- 自分が帰国した後の現地の状況が想像できない人。

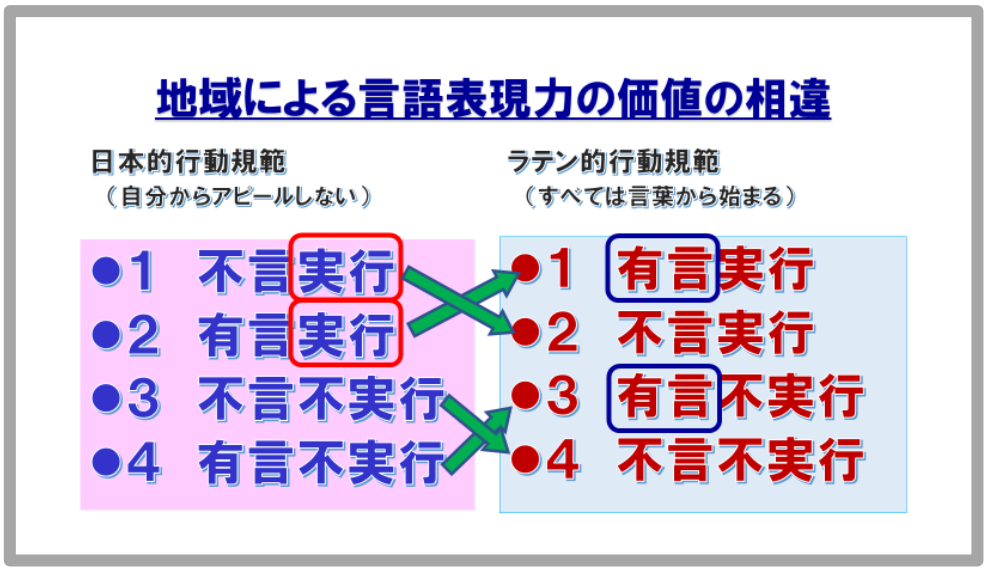
★その他の大切なエピソード

- 現地の人々が本当に望んでいるものは何か。
  （見かけに惑わされない観察力、分析力が不可欠）
- 本当に役に立てたか否かは、共に働いてきた現地の皆さんが判断すること。
- 美談と自己満足の罠。
  （小さな親切大きなお世話という自戒）
- 喜ぶ人のいる仕事。
  （現地の皆さんが喜ぶ姿を見る自分自身）
- 自動車整備隊員の苦悩
  （部品がなくても動かす技術に驚かされる）
- 南の島のはだしの人々と靴のセールスマン。
  （誰も履いていなければ仕事はないか大チャンスか）
- 体育隊員の創意工夫。
  （身近にあるものを活用する）

感謝の言葉

それでは最後に
海外事務所長時代に、当時のホンジュラス共和国の教育省文部次官からいただいた言葉をご披露いたします。
「日本のボランティアたちは、日本にいれば、好きなことができ、おいしいものを食べ、何不自由のない生活がおくれるのに、これまで関わりの無かった、私たちの国へ来て、2 年もかけて、私たちの生活や教育が少しでも良くなるよう、毎日、努力や工夫をしてくれています。また彼らは不自由さを楽しんでいるようにも感じました。活動に取り組む真摯な姿とボランティア・スピリットは、現地のスタッフや子どもたちの心に、大きな影響を与え続けています。」
そして最後に「私は、この国の子供たちが青年に成長した時、貧しく恵まれない人々のために、自ら進んで支援や協力をしてくれるものと心から信じています。」と結ばれました。

地域による言語表現力の価値基準を表にしてみました。
日本的な行動規範は、実行力が優先され、「できる人」として評価されます。言葉少なく、自己アピールを控え、実行できる人。
それに対し、ラテンアメリカでは、まずは自己アピールです。実行できなくとも、多弁であるほうが「できる人」になります。
また生活していて彼らの言い訳の上手さにはお手上げでした。
日本人としては、実行できなければ、言い訳をしないほうが誠実と感じますがいかがでしょうか。



「異文化の人々との共生」に関連する資料を調べていた時に、金子みすゞさんの「私と小鳥と鈴と」という素晴らしい詩に出会いました。
日本人として、この詩の心を大切にしながら、まずは私たちから、異文化の人々とのかかわりを変えていきましょう。

「私と小鳥と鈴と」
金子みすゞ

私が両手をひろげても
お空はちっとも飛べないが
飛べる小鳥は私のやうに
地面を速くは走れない
私がからだをゆすっても
きれいな音は出ないけど
あの鳴る鈴は私のやうに
たくさんな唄は知らないよ
鈴と　小鳥と　それから私
みんなちがって　みんないい

金子みすゞ［一九〇三-一九二九］の詩
それぞれが べつべつで でもそれに優劣は無い
それぞれが 素晴らしい ということ

それでは最後に、お願いが 2 つございます。
一つ目は、これから皆様が、様々な機会に出会うであろう外国の方々に、ぜひ柔軟でポジティブな関心を寄せていただきたいと思います。共存共栄をぜひ実現していきましょう。
二つ目は、皆さんの身近に、国際協力に参加したいという方がおられれば、ぜひ応援をお願いしたい。海外協力隊事業は20歳から69歳まで応募が可能です。
どのような協力活動がどこの国で必要とされているかなど、詳しくは海外協力隊のホームページでご確認ください。

本日はご清聴ありがとうございました。